
4 8 歳、南次郎！

唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

48歳、南次郎！

【Nコード】

N2684B

【作者名】

唯

【あらすじ】

路地裏に落ちていたペンギンのぬいぐるみ。だがその中にはちゃんと魂が宿っていた。だがそんな事知られず、ぬいぐるみは男の家に連れていかれ……。ぬいぐるみの冒険、いざスタート！

episode 1: ペンギンさん。(前書き)

これは私の友達からもらったペンギンのぬいぐるみが元になった話です。

オモチャ屋などで売ってるペンギンのぬいぐるみを想像しながら読んでもらえると嬉しいです。

episode 1: ペンギンさん。

「・・・ん・・・」

暗い路地裏で何かが動いた。

「どこだここは・・・？」

「ママー。あれ何い？」

子供がこちらを指差している。

（何？ 何、だと？ お前こそなんなんだよ。俺は人間・・・。）

自分の体を見て、動きが止まった。

つぶらな瞳、短い灰色の手、手よりも更に短く黄色い足。どこからどうみてもそれはペンギンだった。

「なんじゃこりやあぁっ！！？」

しかもぬいぐるみだ。

「ちよつと待て！！ 何なんだこりや！？ ちよつ・・・ええ！？」
頭を抱えようにも手が短くて抱えられない。せいぜい頬の辺りまで届くくらいだ。無性に泣きたくなった。だがツルンとした真っ黒な瞳から涙が流れることは無い。

ぬいぐるみが口をパクパクしていると、何者かが近づいてきた。

（むっ。何か来た。・・・ここは普通のぬいぐるみのフリを・・・）

「・・・ペンギン、か。まあいいや」

来たのは成人男性だった。ぬいぐるみの頭をむんずと掴むと、そのまま歩き出した。

（なんだコイツ！？ 人様の頭簡単に掴みやがって！）

今はペンギン様のぬいぐるみがそんな事を思っているとも知らず、男は一軒の家へ入った。恐らくは彼の家だろう。

新築なのだろうか。入った瞬間、木の香りが鼻をくすぐった。

（つつてもぬいぐるみだから鼻なんてねえけどな）

男は靴を脱ぐと、台所を通り過ぎ、風呂場の脱衣所に入った。そこには洗濯機が置いてあった。彼の行動はまさか、と緊張するぬいぐるみを裏切らなかつた。

予想通りぬいぐるみを洗濯機の中に放り投げると洗剤を入れた。そしていよいよ洗濯機を動かす。

「おいコラー！ 俺は生きてるぞ！？ 生き物を洗濯機の中に入れていいのか！？ なぁいいのか！？ ちよっ……」

そう言ってる間に洗剤と水が責めてきた。ぬいぐるみは一瞬にして水に埋もれた。違う意味で泡を吹きながら激しく回転する。

（ヤベエ！ 死ぬ！ 死ぬぞこれ！！ っつか泡不味い！ どうせなら美味しい泡にしろよ！！）

そんな無茶苦茶な事を考えている間に洗濯機が止まり始めた。ガコン、と音を立てて完全に止まる。蓋が開き、男が顔を覗かせた。びしょ濡れのぬいぐるみの頭を再度掴む。

男は階段を上がって2階へ行くと、ベランダに出た。そしてポケットから何かを取り出した。洗濯バサミだ。

（……ちよつと待て……。それはマズイだろう。それはやっぱちよつと……な？ ヤメロ？ ヤメロよ？）

しかし男はぬいぐるみの考えを裏切らなかつた。洗濯バサミはぬいぐるみの手を捕らえ、そのままぶら下げた。

（……あの野郎……。ぬいぐるみだと思って好き勝手やりがって……）

だが長時間挟まれているうちに段々と麻痺してきて痛みはなくなつた。それどころか、なんだか気持ち良く感じる。運良く今日は快晴で、ぬいぐるみはすぐに乾いた。

ポカポカ陽気の中でそよ風に吹かれながらぬいぐるみは「悪くないな」と思い始めていた。

（あー。こうしていると子猫のミヤンちゃんと一緒にペリーさん&黒船見てた事を思い出さず……）

お前何歳だよ、とツツコミたくなる事を考えてるうちに、ドアを

開けてさっきの男が出てきた。

「よし。乾いたな」

男はぬいぐるみを洗濯バサミから奪い取った。

(・・・アイター・・・)

さすがにそれは痛かった。しかしここで声を出してしまったら、この男は即座に焼却炉へと向かうだろう。そうしたらお終いだ。必死に声を出すのを堪えた。

中に入り、男が持ってきたのは真っ白の箱と真っピンクのリボンだった。ぬいぐるみを箱の中に入れるとリボンで箱を縛る。器用に綺麗な蝶々結びを見せた。

(真っ白な箱なら中也真っ白にしとけてんだ)

真っ暗な箱の中で、ぬいぐるみは生意気にもそんな事を考えていた。

そしてその箱の中で一晩過ごした。

朝、微かに聞こえるスズメの泣き声で目を覚ます。だが真っ暗な箱の中では、目を開けてても閉じてても変わりは無かった。

しばらく箱の中でじっと待っていると誰かが部屋に入ってきた。

「よっ・・・と」

昨日の男のようだ。ぬいぐるみの入った箱を持ち上げ、歩き出した。

自分は歩いていないのに歩く振動が伝わってくる。

(面白え・・・！)

箱の中で、ぬいぐるみは楽しそうにしていた。だが面白いと感じ始めたところで男は止まった。

(なんだよ。もっと歩けよなあ、青二才！つまんねえじゃ・・・)

「沙希。起きてるか？」

(お・・・？)

部屋をノックする音が聞こえる。中から女の声がした。

「お兄ちゃん・・・。何？」

「ほら！ 誕生日おめでとう」

彼女は妹のようだ。男は妹にぬいぐるみの入った箱を渡した。

「え？ あ、そっかぁ……。ありがとう、お兄ちゃん！」

（そっかぁ……。って待てよ、おい！ 勝手に納得してんじゃないよ！ 次から次へと持ち主に替わられる俺の身にもなれよ！ 疲れんだぞ、これ！）

見えない相手に向かってガンを飛ばす。しかし次の瞬間には相手が見えるようになった。同時に眩しい光が目飛び込んでくる。

（眩し……）

「やつだ！ ちょっとお兄ちゃん！ あたしもう子供じゃないのよ！？ なんでこんなペンギンのぬいぐるみなんか……」

「なんだよ！ 人からもらったプレゼントにケチ付けるもんじゃねえぞ！」

「だってこのペンギン見てよ！ ぬいぐるみのくせにヨダレ垂らして……」

「え？」

「あれ？」

兄妹揃ってぬいぐるみを見た。

（！ ヤバイ！ ヨダレ垂れてたかつ！？）

「気持ち悪い！」

沙希はぬいぐるみを投げ捨てた。壁に当たってポトリと落ちた。

「いでっ……」

「……しゃ……。喋……。！？」

「沙希！」

兄の腕の中に倒れ込んだ。妹の体を揺らしながら、「なんでぬいぐるみが喋れんだよ！？」と怒鳴ってきたが、そんなこと本人にも分らない。

よく見ると兄の足も微かに震えている。

「お、俺は決して怪しいもんじゃねえぞ！？」

顔の前で短い手をしきりに振った。

「ぬいぐるみが喋ってどこが怪しくねえんだ！」

「知るかそんなもん！」

「つつかそんな顔でなんで声が太いんだ！」

「うるせえな！ 俺は48歳なんだよ！」

自信満々に言うペンギンを見て、兄は固まった。

「……よ……よ、よんじゅう……はち……？」

「……しまったな。……とにかく！ 俺はただのぬいぐるみだ。いいな？ お前は何も見ていない。お前の妹も何も見ていない。俺はただのぬいぐるみ！ 無視して生活してくれ」

「出来るか、んなこと！」

「するんだよ。お前も男ならな！」

「だから出来ねえよ！ 犬が喋るよりアンビリーバボーなんだぞ！」

「！」

「さらばだ」

「おい！！」

ぬいぐるみはぬいぐるみらしくそのまま動かなくなった。

「……マジで動かねえな……。もしかして夢……。だったのか？」

全く動く気配は無い。しかしよく見ると手がプルプル揺れている。

（早く部屋出てけよ。ずっと止まったままって辛いんだよ！）

「……？ あ、そうだ。沙希大丈夫か？」

兄はそれに気付かないまま、妹を連れて部屋を出た。

「……ふう。危ねえ危ねえ……」

ぬいぐるみは出るはずの無い想像上の汗を拭った。

（これからどうすっかなあ……）

ぬいぐるみは、とりあえずこの部屋を探ってみる事にした。どこかに隠れられる場所があるかもしれない。

「ほーう。ナルホド、ナルホド。ココに布団があつて……。でもベッドの上には布団が敷いてあつて……。この布団は意味無くて……。て事は布団の間に隠れられるかもしれないな」

しばらく悩んだ末、止める事にした。

（もしもあの沙希って女が上に乗ってきたら苦しいじゃねーかよ）

「・・・お！」

（あそこなら・・・）

ぬいぐるみが考えた隠れる場所。それは、部屋の片隅に寂しく置かれてる犬小屋だった。

「でもなんで犬小屋があるんだ・・・？ さてはあの沙希って奴、相当な変わりモンだな？」

トコトコと短い足を一生懸命動かして犬小屋の前まで行く。ぬいぐるみから見れば結構な大きさだ。

「犬小屋、住人がいねえなら俺がなつてやる。いいな？」

答えるはずの無い犬小屋に向かって言葉を投げかける。

「ばっ」

答えるはずの無い犬小屋が答えてしまった。

「これぞ摩訶不思議」

そう言つてぬいぐるみは変な犬小屋の中に入った。中にはたれ耳の犬のぬいぐるみのオモチャが転がっていた。押すとプープー音の鳴るオモチャだ。ぬいぐるみはそれに気付かず踏んでしまい、心臓が飛び出るほどに驚いた様子だ。

「プピッ・・・！ お前・・・うわ・・・。ココに住んでた犬は共食い野郎か！？」

48歳と威張っていた割には、今の世の中を全く理解していないようだ。ぬいぐるみがぬいぐるみで遊んでいると、部屋のドアが開く音がした。

（ヤベ！）

息を殺して部屋の方を見る。居たのは沙希だ。

「もう！ お兄ちゃんつてば子供扱いして・・・。しかもあんなヨダレ垂らしてる汚いぬいぐるみまで・・・。あれ？」

キョロキョロと部屋の中を見回す。ぬいぐるみが居ないことに気付いたようだ。

「お兄ちゃんが片付けたのかな・・・？」

（俺はココにいるんだぜ、お譲ちゃん）

犬小屋の中でぬいぐるみはニヤリとした。

「・・・ま、いつか。着替えよ」

そう言えば沙希はまだパジャマ姿だった。それを聞いた途端、ぬいぐるみの顔つきが変わった。

（着替え・・・。そうか。女の部屋に住み付けばそんな特典が付いていたんだ・・・！ やったぞ、俺はなんてえ幸運の持ち主なんだ！）

見えないギリギリのところで、ぬいぐるみは「ぐへへ」と笑った。48歳、ペンギンのぬいぐるみ。可愛い顔してとんでもないエロ親父だ。

犬小屋の中から目を凝らして見た。目の開きすぎで充血しそうなくらいだ。

（・・・さあ脱げ・・・。早く脱ぐのだ・・・！）

「あ、そうだ！」

（おい・・・！！）

「朝ご飯食べ忘れてた」

（食い忘れんなよ！）

「食べてこーっと」

（ああ、そうだな。朝飯食わねえと太るからな・・・、ってそうじゃねえよ！ 早く脱げてのに・・・！！）

そんなぬいぐるみの思いをよそに、沙希はスタコラサッサと下に降りていつてしまった。

（チクシヨウ・・・）

10分後、沙希が帰ってきた。

（おお！ 待ってました！！）

すると彼女はもう着替え終わっていた。

（・・・あれ？ もしかして・・・もう終わった・・・？

なんで？ として？)

ぬいぐるみのテンションは一気に撃沈した。

(なんでだ……。なんでだチクシヨウ……。！…………お？)

しかしそう沈んだものでもなかった。沙希は高校の制服を着ていた。スカートは短い。

少し回るだけでもスカートが捲くりあがりそうだった。

(……。よっしゃ……。いいぞ、いいぞ！ 回れ！ 上がれ！！)

48歳、ペンギンのぬいぐるみ。本当にどこまでもエロ親父だ。

だがぬいぐるみの期待は裏切られ、全く回る事もなく沙希は学校へと行ってしまった。ポツンと取り残されたぬいぐるみは、犬小屋の中で「…………ヒデエゼ……」と呟いた。更に寂しくその声が犬小屋内に木霊こだました。

その日は沙希が帰ってくるまで一人寂しく「プーピーぬいぐるみ」と遊んでいた。

episode 2：第一の名前！門佐武郎

ペンギンのぬいぐるみが来てから3日が経った。

（うおおおお！！ 沙希ちゃん気に入ってきたぜ！ あの子は可愛い！）

ぬいぐるみは無言でガッツポーズを決め、こちらをクルリと向いた。

「・・・申し遅れた。俺はペンギンのぬいぐるみだ！ ワケあつてペンギンのぬいぐるみになっちまった！ 理由は俺にも分からん！」

今、このぬいぐるみは沙希と言う女の部屋で過ごしている。沙希はコイツが喋るぬいぐるみだと言うことは知っている。だが自分の部屋に住みついてるだなんて微塵も思っていないだろう。

ぬいぐるみの今の家は、何故か沙希の部屋の片隅に置いてあった喋る犬小屋だ。

しかし喋ると言っても「ばう」としか言わない。それも鼻がつまつたような、クレヨンしんちゃんの「ぼーちゃん」のような、そんな声だ。

（・・・む！ 誰か来た！）

誰かが沙希の部屋のドアを開けた。

「沙希・・・？」

今ドアを開けた男。彼は沙希の兄だ。この兄もぬいぐるみが喋る事を知っているが、彼の中では「夢」と言うことで終わっている。勿論自分の家に住みついてるなんて全く知らない。

「・・・？ つかしいな。さっき物音がしたような・・・」

（ヤバイ！ バレる！？）

「空耳か？」

兄は首を傾げて出ていった。

（・・・セーフ・・・）

ぬいぐるみは短い手を極限まで伸ばしてセーフのポーズを取った。

「なあ犬小屋、お前名前は無いのか？ 無いと呼び辛いぞ」

「ばう」

「お前はホントにそれしか言わないな。じゃあ俺が付けてやるぞ」

「ばう」

「うーん。そうだなあ……。ばうつてばかり言ってるから「ばあう」！」

「……ばうッ!!」

「うわー！ ヤメロ！ 分かった！ 悪かった!! ばあうは無いよな!! 分かったから壊すのはヤメロ!! 俺の唯一の住み家なんだ!!」

土下座をしてお願いと、犬小屋は怒るのを止めた。

「じゃあ……。パウ！ どうだ？ まともな名前だろう？」

「ばうばう！」

「お！ 気に入ったか！ よし、パウ！」

「ばうあう」

今まで「ばう」としか言っていなかった犬小屋——パウ——が「ばうあう」と言った。これはぬいぐるみに取っても嬉しい出来事だった。

「お前……。今ばうあうつて……。！ 凄い！ 新しい言葉が言えるようになったんだな!? よし、その調子でドンドン覚えろ。最終的には俺とお話ししよう!!」

「ばうあう」

どうやら育成シミュレーション風犬小屋のようだ。

（面白い！ 沙希ちゃんは何でコレを持ってたんだ!？）

「沙希!？」

「うわっちょ!!」

またさっきの兄だ。急に開けられたので、ぬいぐるみもさすがにビックリして声を出してしまった。

「……うわっちょ……。? あれは絶対に沙希の声じゃないな・

・。誰か居るのか!？」

(んなもん鬼ごつこの途中に止まれって言ってるようなもんだ。居るのかって聞かれて返事する馬鹿居るはずねえだろ。このバーカバ
ーカ・・・)

「ばうあう」

(・・・返事してるよ、コイツ・・・。パウ、お前は馬鹿なのか?)
「ああ、ポチ太郎・・・」

(ポチ太郎!? 普通にポチだけで良くねえ!?)

「変な人とか見たか?」

「ばうあう」

「ばうばう?」

「ばうあう」

「ばう?」

「ばうあう」

「ばうばう」

「ばうあう」

「そうか、見てないのか」

(会話してる! コイツばうあう言って会話してるっ!!)

「チクシヨウ、誰が居やがんだ?」

兄はベッドの下や机の引き出しなど、ありとあらゆる所まで探っている。

(おいおい、レディの部屋をそんな勝手にさばくるなんて男として
どうなんだよ。おお? 青二才よお)

お前も人の事言えないだろ、とツツコミたくなった時、ずつと下
を向いていた兄が急に顔を上げた。

「! もしかして・・・あのペンギンのぬいぐるみかっ!？」

(ゲッ・・・バレた!?)

「やっぱり夢じゃなかったのか・・・!？」

(いや、夢だ! お前は何も見ていないんだ! 勘違いするな!)

「ポチ太郎! 本当の事を言え! お前は何か見たか!？」

(だからさあ、コイツはばうあうしか言わねえつつのに・・・)

「ばうあう」

「ばう！」

「ばうあう」

「ばうばうばう」

「ばうあう」

「見た？ 見たんだな？ ソイツはどこ行った？」

(うそっ！？)

「ばうあう」

「何っ！」

「ばうあう」

「フムフム。よし、分かった。ありがとう！」

(分かっちゃったのかよ！！ 絶対適当だと思ってたのに！！)

兄は部屋を出ていった。

「・・・パウ？ お前、兄に嘘付いたのか？」

「ばう」

「そうか。助かったよ、サンキュー」

(つて・・・俺もコイツと会話しちゃってんじゃん)

「もう逃げられないぞ！！」

「だびょーん！！」

再度兄が急に入ってきた。ぬいぐるみはまた変な言葉を発してしまった。

「今度こそ聞こえた！ お前は・・・」

(やバイ！ 気付くな！ 気付くなッ！！)

「そこだっ！！！！」

兄は確実にパウの方を指差していた。

(バレた・・・)

「観念して出てこい！ もう隠れたって無駄なんだ！！」

(・・・マジかよ・・・)

「早く！ 出てこないとお前の家族を殺すぞ！」

（ああああ！ 止めてくれ！ それだけは勘弁・・・仕方ない、出ていくか・・・）

「早く出てこい！！」

兄は手を伸ばした。

（うわあっ！ いじめる気だ！ 俺をいじめる気だ！！）

「ホラ早く！」

だが兄が手にしたのはパウの後ろの棚だった。

（・・・コイツ、あれ？）

「ふっふっふ・・・。最後に言いたい事はあるか！ 俺も鬼じゃない。聞いてやつてもいいぜ」

（・・・コイツ、アホだ）

「どうした！ 言ってみろ！！・・・無いんだな！？」

（・・・大丈夫だ。お前のアホ面はちゃーんと拝んでやる）

「さあ、出でよ、クソペンギン！！」

兄はカッコ付けて勢いよく開けた。しかしその中には沙希の私物が入っているだけで、兄の言っていた「クソペンギン」なんて物はどこにも無かった。

「・・・あ・・・あ、あれ？」

（ぎゃあはははははッ！ バカだコイツ！ バカだコイツー！！！！）

「なんで居ないんだ・・・？ ポチ太郎！ お前嘘ついたな！？」

「ばうあう」

「うるさい！ 言い訳するな！！ お前なんかっ・・・」

興奮状態だ。こうなってしまうては手のつけようがない。兄はパウを持ち上げようとした。

「ばう！ ばうあうっ！！」

「うわっ・・・ちよちよちょー！！！！」

持ち上げたパウを傾けたため、兄の足元にペンギンのぬいぐるみがポテッと落ちた。

「・・・」

「安心しろ、一気に燃やしてやる」

「もっ、燃や・・・!？」

「おう。お前みたいに子供に悪影響なぬいぐるみは放置しとけるワケが無いだろ。ホラ、外に出ろ」

「まっ待て！ ダメだろう！ それはちよつと・・・」

「何がダメなんだ！ お前がこの世に居る方がもつとダメだろ！

喋るぬいぐるみが街出歩いてみる！ みんな地震時並みにパニくるぞ!!?」

「ダメつつたらダメ!! ほら、なんつつたつけ？ その、えつと・・・だ、ダダダイオキシンとかさっ！ そ、それに・・・お前、俺の事勝手に拾ったんだぞ！ そんで勝手に自分の家に連れてきて、最後は勝手に俺の人生終わらせようつてのか!? そんなの勝手が過ぎるだろう!!」

「・・・まあ・・・確かにそりゃそうだけどさ」

（素直だな、おい。このまま行きゃあココに住ませてもらえるかも・・・）

「だけどな!」

ぬいぐるみが考えていると兄が怒鳴った。

「な、なんざましょ」

「人の妹の着替え姿を勝手に見た事の罪は重い!」

「・・・ハイ」

「よつて・・・」

「・・・・・・」

「・・・ばうあう」

「・・・やっぱ処刑だな、うん」

「ちよつと待てコラ!! 頼む! 殺さないでくれ!」

ぬいぐるみはその場で土下座した。と言つてもそのままうつ伏せに寝転んだだけだ。

「殺さないでくれ、か。だったらその誠意を俺に見せな!」

「誠意・・・ですか」

「ああ。信用できない奴を家に置く程までは心広くないもんでね」
（・・・弱いぬいぐるみを燃やそうとした奴がよく言うぜ・・・なにが「までは」だ!）

「早くしろよ！ 行動次第では即燃やすぞ」

「あああ！ ハイ！ いやあーご主人様、私ねえ、お料理することが出来るんですよ。魚の氷漬けとか氷の魚とか魚氷とか・・・」

ぬいぐるみはゴマスリポーズでそう言った。全て同じメニューだ。そして全て常人の食べれるものではない。

「・・・それしか出来ねえのかよ」

「いえいえいえいえ！ とんでもない！ 面白い物もお見せするこ
とが出来るんですよー！ 氷魚のワン転がしとか氷魚の野球とか氷
魚のゴルフとか・・・」

「なんだよ、氷魚のワン転がしって・・・」

「すみません、間違えました。氷魚のフン転がし・・・」

「もういい！ ヤメロ！！・・・お前誠意の意味間違って覚えた
んじゃねえ？」

「年上に向かってお前とは何だ!」

「・・・おー？ そんな口聞いていいのかなあ？ 燃やしちやあつ
かなあー」

「ごめんなさい。許してください。私が悪うございました」

「・・・まあ・・・悪い奴じゃあなさそうだしな・・・
だけど沙希の意見も聞かないといけないだろ。アイツが帰ってくる
まで待て。それまでお前の事は保留だ」

「イエッサーでございまっさー!」

ぬいぐるみは敬礼になつてない敬礼をすると、勢いあまって後ろ
に倒れた。

「・・・ところでお前、名前は？」

「俺の名前は藤原門佐武郎だ!」

「誰!? いつの人!? つかどーゆーネーミング!?!?」

「現代の人に決まってるだろう」

「門佐武郎・・・なんか呼び辛いな・・・」

「仕方ないだろ、そういう名前なんだから」

「でもなあ・・・ペンギンに門佐武郎は無いだろ・・・」

そう言う兄は下を向いて考え始めた。

「お前の名前は？」

「・・・俺？ 俺は盛岡明良だ」
もりおか あきら

「明良か・・・。なあ、明良！」

「なんだよ」

「門佐武郎よりいい名前だな！」

爽やかに笑ってそう言った。だが明良の反応は違った。

「黙れ、お前」

そう言っただけで考える。

「・・・まあいつか。沙希に考えさせとけ」

「なあなあ！ 沙希ちゃんって可愛いなあ！」

「そ、そうか？ 分かるか・・・？ 可愛いだろう！？ お前セン

スいいじゃねえか！ もう自慢のいも・・・」

明良はハツとした。その途端、顔が真っ赤になる。それを見て門

佐武郎はニヤリと笑った。

「おーう、どうしたあ？ もっと言えば、明良」

「黙れペンギン！！」

門佐武郎はまた明良に蹴り飛ばされた。

episode 3：第二の名前！南次郎

「ただいまー」

夕方4時、沙希が学校から帰ってきた。座って靴を脱いでいると、中から明良が出てきた。

「あ、お兄ちゃん。ただいま」

「ちよつと来い」

「・・・・・・？」

明良に呼ばれ、沙希は2階へ上がる。兄は沙希の部屋に座っていた。

「なに・・・・？ あたし何もしてないよ」

「分かってる。・・・・これ、見てくれ」

明良はぬいぐるみ、門佐武郎を沙希に見せた。その途端、彼女の額に青い筋が4本程入った。

「こっ・・・・こここっ・・・・これっ・・・・ここっ」

「ニワトリかお前は」

「なんで！？ どうして！？ だって今まで無かった・・・・」

「ポチ太郎の中に隠れてやがったんだ」

「ポチ太郎じゃねえ！ パウだ！！」

門佐武郎は明良に向かって怒鳴った。

「・・・・これって・・・・あれ・・・・あれでしょ？ あの・・・・馬鹿みたいにヨダレ垂らしてたぬいぐるみでしょ・・・・？」

「この小娘！ 馬鹿とはなんだ。俺はお前よりもスッゲエスッゲエ年上なんだぞ」

「お前は黙ってろ」

明良は門佐武郎の頭を小突き、続けた。

「コイツをな、家に置こうかと思って・・・・」

「ヤダよ！ 絶対ヤダよ！！ コイツが居るんならあたし、この家出てくからね！！？」

「おい沙希・・・」

「この世に喋るぬいぐるみが居るなんて考えただけでゾツとするもん！！」

「考えなくても目の前に居んだろーが」

元々出っ張ってるクチバシを更に出っ張らせて言った。

「喋らないでよ気持ち悪い！！」

「でもな沙希、コイツ、まあ悪い奴ではなさそうなんだ」

「悪い奴でも悪く無い奴でも気持ち悪いモンは気持ち悪いの！！」

お兄ちゃんは何！？ 妹よりもぬいぐるみを取るっての！！？」

「そんな事言つてねえだろ」

「沙希ちゃん落ち着け」

「気安く呼ばないでよ！！」

「ぐえっ」

沙希は明良の膝の上に乗っていた門佐武朗を蹴飛ばした。豪快に窓にぶつかると、その場に落ちた。

「・・・な、なんでこの兄妹は物を大切にしないんだ・・・」

「沙希！ 何すんだ！！」

「なによお兄ちゃんのバカ！ なんでぬいぐるみの味方するの！？」

「・・・ただのぬいぐるみじゃない。・・・放つとけないだろ・・・」

「（・・・明良・・・！）」

門佐武朗は床に転がったまま明良を見た。

「バカバカバカ！ お兄ちゃんのバカッ！！ こんなやつ・・・」

沙希は門佐武朗のまん前に立ちはだかり、何度も何度も蹴りつけた。

「沙希ッ！ バカやめろ！」

「なんで止めんの！ お兄ちゃんコイツに催眠術でも掛けられてるんじゃないの！？」

「掛けられてるわけねえだろ！ とにかくやめろ！」

明良がそう言っても沙希はやめない。仕舞いには包丁を持ち出す

始末だ。門佐武朗を手にとると、包丁を突きつけた。

「沙希、やめろ・・・」

「近づかないでよバカ！！ 訂正して」

「あ・・・？」

「コイツを家に置くなんて訂正して！！ 早く元あった場所に戻してきて！！！」

「・・・なあ、少し話を聞いてくれ」

「話・・・？ コイツを戻す事以外に何を話すっての！？」

「いいから聞けよ！！」

明良は強い力で沙希の腕を掴んだ。その拍子に包丁が足元へと落ちた。幸い床に転がっただけだった。

「・・・・・・」

「分かるよ。お前が拒否すんのも分かる。怒鳴りたくなる気持ちも分かる。だけど、コイツはお前の部屋に居た時お前になんかしたか？ 嫌な事とかしたか？」

「・・・・・・してないけど・・・でもそういう問題じゃなくてっ」

「じゃあなんだ？ 包丁まで持ち出してブツ刺したくなる理由はなんだ？」

「・・・・・・」

「沙希ちゃん、腹綿煮えくり返ってるのか？」

「字が違う」

「！ 何故分かるんだ！！ でもピンポーン。腹綿あんのは俺だけだもんね？」

「黙れつつってんだろ！」

明良がまた門佐武朗の頭を殴ると、今度こそは気絶した。

「なあ沙希。頼む。コイツ、中身は人間なんだ」

「！！？ 更に気持ち悪いよ！！ やっぱり捨て・・・」

「中が人間だからこそ・・・！ 頼む・・・！！」

「どうしてそんなに必死になるの」

「自分でも分からない。とにかくコイツは家に置いといた方がいい、

つて……………そう思うんだ」

「……………でも喋るぬいぐるみだよ？　あたしの友達が遊びに来た時はどうするの……………」

「安心しろ。コイツは俺の部屋で飼う」

と言うことで、門佐武朗は明良家に住まわせてもらう事になった。

「俺の名前は門佐武朗！」

「ペンギンのぬいぐるみに門佐武朗は無いからさ、だから沙希。お前何かいい名前ないか？」

「……………名前……………。ペンギンって、北極？　南極？」

「……………南極、かな」

「南極……………南……………南太郎……………」

「南太郎！？　なんか「なんだよう」って言われてるみたいで嫌だぞ」

「ちょーつと無理があるかなー。「なんだよう」に繋げるのは」

明良が後ろから門佐武朗の頭を引っ掴んだ。

「あ、や、やつぱり？」

「じゃあどいう名前がいいの？」

「……………日本らしい名前」

門佐武朗がそう言うのと沙希は更に考え込んだ。5分程経った時、口を開いた。

「……………次郎……………」

「次郎？」

「そこに南極の「南」をくつつけて、「南次郎^{なんじろう}」！」

門佐武朗の目が輝いた。

「南次郎……………。そうか、南次郎か。いいな。南次郎……………。響きが気に入った！」

「南太郎とそう変わんねえけどな」

呆れ顔の明良がボソツと言うと、門佐武朗は「南次郎アタック！」と言って明良に体当たりした。

「じゃあこれから南次郎ね！」

「おうっ」

「なんじろ なんじろ なんじろー」

「やかましい！ 歌うな！！」

南次郎は明良に蹴っ飛ばされた。壁にぶつかっても南次郎は笑顔だった。

「・・・気持ち悪っ！ お前Mか？」

「なんだと・・・。失礼な事を言うなっ！」

怒りながらも笑顔の南次郎を見て、沙希も明良もプツと笑った。

「・・・ねえ、って言うかさ、どうして人間がぬいぐるみになったの？」

「俺にも分からねえんだ。昼寝してて起きたらこんな姿に・・・」

「ばうあう」

横から声が出た。振り向くと、いつの間にかパウが傍に来ていた。

「お、パウ！」

「ばうあう」

甘えた声を出し、南次郎に体をこすり付ける。

「いててててっ！ お前体が木なんだから痛えだろっ」

「ばう・・・」

「ところで、お前はなんで沙希ちゃんの部屋に居たんだ？」

「ああ、ポチ太郎はね、4日前に家の前に佇んでたんだよ」

「・・・4日前・・・！？」

いきなり南次郎が大声をあげた。彼のまわりにはなんとも言えないオーラが漂っている。

「な、な、なに？ どうしたの・・・？」

「4日前つつつたら・・・」

「・・・・・・？」

「俺がこの姿になっちまった時じゃねえか」

「・・・へえー。偶然だね。あ、じゃああたしご飯の用意しなきゃ・・・」

沙希がビクビクしながら立ち上がる。兄の明良も頷きながら立ち

上がった。

盛岡兄妹の中には「まさか」と言う思いもあったが、とりあえずはそのまま部屋を出ていった。部屋の中には南次郎とパウだけが残された。

episode 4：最終話。犬小屋の正体

しばらく見合っていた南次郎とパウだったが、日が沈み始めてや
つと南次郎が口を開いた。

「お前、ホントは誰だ？」

「ばうあう」

「ホントはもつと色んな言葉が喋れるんだろう？」

「ばう……」

「喋ってみるよオラ！！」

短い足でパウを蹴った。すると、パウは「イテッ」と声をあげた。

「やっぱり喋れるんじゃないかねえか……」

「……」

「どうしてあんな演技してた？」

「……」

「なんとか言ったらどうなんだ！」

「うるせえよクソペンギンが」

急にパウの声が変わった。「ぼーちゃん」の声からはかけ離れた、
ダークな低い声だった。

「なにがパウだ。勝手に変な名前付けやがって」

「……」

「俺の本当の名前はな、「バケードタリオン」つつうんだよ」

「……長いっ……」

「……」。フン。その馬鹿頭じゃ覚えられないか？」

バケードタリオンは思い切り馬鹿にした笑いを見せると、2本足
になって立ち上がった。赤い木の屋根が割れて崩れていく。じきに
小屋全てが壊れ、中から出てきたのは人間の男だった。

その人間を見た瞬間、南次郎は固まった。

「……！！ やっぱりお前……」

「俺がお前の人間の姿を取ったのさ、驚いたか？」

少し吊り気味な目で南次郎を見ている。長身だ。顎鬚あごひげは少し生えていて、口にはタバコを銜くわえている。体は門佐武朗の男は近くの椅子にドカッと腰を下ろした。

「パウ・・・お前・・・」

「俺はバケードタリオンだと言っただろうが」

「じゃあ・・・じゃあお前のホントの体は・・・！？」

「お前と同じ方法で取られたんだ。誰が取ったかは知らねえが・・・。犬小屋の姿で街ブラついてたらお前が目に入った。「こりゃあいい」と思った。だから取った。それだけだ」

「なら俺は・・・もう人間には戻れねえって事か・・・！！？」
バケードタリオンはタバコを指で挟み、口から煙を吐き出す。そして立ち上がって洗面所に向かった。そこで灰をパラパラ落とすと人差し指を立てた。

「方法は1つだけあるぜ？」

「なんだ！？ 教えてくれ・・・！」

もう一度口に銜えたタバコを挟むと、南次郎の顔に向けて煙を吐いた。目の前のぬいぐるみはむせて後ろに転がる。

その転がったぬいぐるみの前にしゃがみ込むと、「同じだ」と言っ

「た。・・・え・・・？」

やっと咳が止まり、南次郎は手をバタつかせて起き上がると目の前の男の顔を見た。

「同じだよ、俺と。お前も人の体を取りゃあいい」

「・・・」

「出来ないのか？」

「・・・体を取られた人間はどうなる？ 俺等と同じようになっちゃうのか・・・！？」

「どんな姿になるかは知らねえが、そうなるのは確かだろうな」

「・・・無理だ」

「あ？」

「他人を不幸に陥れてまで自分の幸福は望まん！」

バケードタリオンは不服そうな顔で微妙に眉を動かし、テーブルにタバコの焼き跡を付けると、肩を動かして笑い始めた。

「偽善語ってんじゃないよ。ケツがむず痒くなるぜ、そういうセリフ！」

「偽善なんかじゃない。人の体を取るくらいなら俺が一生このままでいた方がマシだ」

「・・・それが善い奴ぶってるつつてんだよ!!」

「俺は人の体になっていい気持ちにはなれねえんだよ！ 第一気持ち悪いだろ！ 他人の体だぞ？ それに俺だったらもつと若いカツコイイ人の体を取るぞ!？」

「凄く矛盾してるぞ、それ・・・」

「そうか？」

バケードタリオンは一度肩を落とすと、勢いよく顔を上げた。

「あのなあっ！ 体を取り替える事が出来るんだぞ!? 下手すりゃ・・・つか下手しなくても女にだってなれるんだぞ!? そんな絶好のチャンス逃すのかお前は!？」

「・・・女にも・・・」

（！ 気持ちが揺らいでいる!!）

バケードタリオンはそう確信し、小さくガッツポーズを決めると続けた。

「そうだ。女にもだ。こんなラッキーチャンスはもう一生来ないぞ!？」

「だけどうしてそこまで勧めるんだ？」

「人の不幸は蜜の味と言うだろ。他人の不幸を見るのが一番の生き甲斐なんだっ」

「・・・寂しい奴め」

「何か言ったか？」

「いや、何も・・・。て事はなんだ？ 俺はお前の生き甲斐の為にこんな姿になったってのか？」

「まあ。そうだな」

さらりと言つてのけるバケードタリオンを見て、怒った顔になった南次郎は必殺技をお見舞いした。

と言つても明良の時と同じように「南次郎アタック！」と言つて体当たりしただけだ。

「一度体が替わつたらもう他の体に替える事は出来ないのかっ!？」
「いや。出来る」

「………だつたら早く俺の体返せ！ 即返せ！ 今返せー！
!！」

バケードタリオンは、また飛びかかつてきそうな南次郎を軽く蹴飛ばした。

「慌てるな。さっきも言つたろう？ 人の不幸を見るのが俺の生き甲斐なんだ。そう易々と喜ばせてたまるかよ」

「……お前を野放しにしようとまた誰かが苦しむのか……!？」
「だろうな。……そうだ。お前、人にやられるまえに自分でやつちまうつてのはどうだ？」

「ふざけるな！ 俺にとつちや人の不幸なんざ生き甲斐でもなんでもないんだよ！ テメエの欲望の為に人を使うのはヤメロ!!」

「フン。ならどうするつもりだ？ ずっと一生このままか？」

「ああ。明良も沙希ちゃんも許してくれたからお前の中で暮らすこともなくなつたしな。このままでも不自由なく生きていけるさ」

南次郎が自信満々にそう言つと、バケードタリオンはまた笑つた。
「お前は相当なアマちゃんだな。………本来喋るはずも無い、動くはずも無い、そんな物が喋つたり動いたりすんだぞ？ 一部の人間は分かってくれたって世界の人間の大半が分かつたとなんてしやしねえ!! それどころか気持ち悪がつたり、仕舞いには沙希みてえに包丁とかナイフとか持ち出す人間だつて居る!! そうなつちまつたモンの苦しみを体で味あわせてやるんだよッ!!」

「それじゃエンドレスじゃねえか！ そうなっちまったら苦しみは絶えない！ 誰かが自分の体だけで留まらせてないとダメなんだ！」

「いい加減分かれよクソ野郎がッ！！！」

バケードタリオンは南次郎の体を掴むと、思い切り顔を殴りつけた。一瞬にして床に叩き付けられる。ぬいぐるみの体の柔らかさで、一度バウンドしてから床に転がった。

「世間知らずの馬鹿野郎共がヘラヘラ笑って過ごしてんのが気に食わねえ・・・！」

「・・・だけどつ、これは誰しもがなる物じゃない！ わざわざ苦しみを広げる必要はないだろう！！」

「誰しもがなるモンじゃないからムカツクんだ！！ なんで俺等ばかりこんなに変な思いをしなくちゃならない！？」

「俺が知るわけねえだろ！ それが運命なんだって受け止めりゃいい話だろうが！」

「お前は受け止められんのかよ！？」

「ああもう受け止めてるさ！！！」

南次郎がそう叫んだ。いつもより更に低く地面に響くような声。

その後、2人は荒く息をして一言も喋らず、討論は終わった。

「・・・これから、どうするつもりだ？」

バケードタリオンが口を開いた。

「俺の・・・今はお前の体になっちまってるけど・・・俺の体を取り戻す方法はないのか？」

「それは俺にまた犬小屋に戻れと言ってるのか？」

「まあ。そうなるな」

「ふざけんな。あんなのに戻る気なんて更更ない」

口を尖らせてそっぽを向いた。

「もしお前がその体から抜けたら体はただの肉叢しむらになるのか？」

「・・・そうだけど、肉叢ってお前・・・」

「それでまた俺が体の中に入ればいいって訳だ？」

「ああそうだなっ！　だが俺はこの体から出る気は全く無いぞ」

「だったら二次災害を防ぐ為にもテメエをぶっ殺す！　二度と動けなくしてやる」

「馬鹿だな、ホントに。体の所有者が死ねばお前も死ぬんだぜ？」

「・・・え・・・？」

「体と魂は微かな力でも繋がってたんだ。だからお前は部屋を見回しただけで俺を見つけた。俺の中で暮らそうと決めた・・・」

バケードタリオンは、南次郎の驚愕に満ちた顔を見るとケラケラ笑い出した。

「なんだよその面！？　お前が死んだらぬいぐるみは元に戻る。動かなくなるんだ。だったら俺が他の奴の体を取った方が他人事でいいだろ？」

「・・・だから・・・俺はその考えが好かないんだ！！　これでも喰らえ！！」

南次郎はそう叫んで構えると、バケードタリオンに向かって凄スピードで飛んでいった。

「南次郎のスピンスッピンボコボコパーンチ！！」

「なんじゃそりや・・・あぐッ！」

空飛ぶぬいぐるみのパンチは、見事バケードタリオンの顎に命中した。そのまま後ろへ倒れ、南次郎もその上に着地する。

「油断してると・・・舌嚙むぜ？」

思いつきりカメラ目線でそう言った。

「・・・い・・・いてえ・・・」

「参ったか、バケードタリオン！」

「バケードだ！！」

「・・・今まで・・・何人の体を取ってきたんだ・・・？」

「5人だな。お前は記念すべき5人目の被害者さ」

「・・・俺の体はくれてやる。だからもう人の体を取る事はやめろ」

バケードタリオンは目を伏せて黙り込んだ。南次郎が何か言おう

とした時、下から沙希の声が聞こえた。

「南次郎ー！」

「沙希ちゃんだ」

南次郎はいそいそとバケードタリオンの上から下りた。ジャンプしてドアを開けようとした時ふと振り向き、手を顔の前に出して言った。人間で言えば人差し指を立てている状態だ。

「いいか？ 次誰かの体を取ってでもしてみる。今度こそお前の息の根止めてやるからな！」

まん丸の黒いおめめで迫力無いながらも睨んだ。そしてフイと後ろを向き、ドアを開けて階段を降りていった。

部屋に1人残されたバケードタリオンは、「チクショウ！」と叫んで床を殴った。

「・・・なんだよ。自分ばつかカツコつけやがって・・・！」

ピョコタンピョコタンジャンプしながら階段を降りていき、沙希の目の前で止まった。

「なんだ？ 沙希ちゃん」

「ねえ、南次郎のご飯って何？」

「・・・そうか。飯が食えねえんだ・・・」

「綿でも突っ込んでくかー？」

後ろで明良が笑いながら言った。

「綿菓子なら大歓迎だけどな。ただの綿は嫌いだ。俺はマスコットじゃないんだ」

「同じようなモンじゃねえか」

「どうするの？ ご飯」

「まあ飯つつつても・・・今まで何も食ってなかったって腹減らなかつたし、大丈夫だ。盛岡兄妹だけで済ましてくれ」

「えー。いいの？ なんか罪悪感が・・・」

「いいのいいの！ おじちゃん放って若い2人で食え」

南次郎は顔の前で手を振り、再び上へ戻っていった。部屋のドアを開けると、もうそこにはバケードタリオンの姿は無かった。

「居ない、か。俺の体で終わりにしてくれよ・・・？」

誰も居ない空間に向かって、問いかけるように言った。遠くで車のブレーキ音が聞こえた。

「おい南次郎、やっぱり一緒に・・・。」

部屋の真ん中でぬいぐるみは転がっていた。しかし何か様子がおかしい。

「・・・南次郎？ 寝てんのか？」

明良はぬいぐるみの近くに行き、その体を揺らした。すると手がピクリと動いた。

「おい、どうしたんだよ？」

南次郎はただのぬいぐるみになりかけていた。遠のく意識の中、頭の中ではバケードタリオンの言葉が木霊していた。

”体の所有者が死ねばお前も死ぬんだぜ？”

「なあ南次郎！？　なんだ、もう寿命か？　早えなあ」

”死ぬんだぜ？”

（死んだのか・・・。まあなんだかんだ言ってもぬいぐるみの視点での世界を楽しませてもらっただけ・・・）

「おいギャグ言ってるんだからツッコミ入れるよ」

（でも・・・せっかくコイツ等と仲良く暮らせると思ったんだけどなあ・・・。）

その瞬間、南次郎はただのぬいぐるみになった。明良もその異変を感じ取ったようだ。さっきよりも激しく揺さぶった。

「・・・なんなんだよ！　起きろよクソペンギン！！　エロジジイでも助平ジジイでもいいから！　なんか言えよ！」

その日、テレビには48歳の男と車が衝突事故を起こしたと言うニュースが流れた――。

『俺は南次郎。沙希ちゃんが付けてくれた名前だ』

『俺は南次郎。ペンギンのぬいぐるみだ』

『俺は南次郎。』

『48歳。南次郎』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2684b/>

48歳、南次郎！

2010年10月8日15時51分発行